第9回　特別企画展　　『江戸名所図会に見る江戸と川崎』

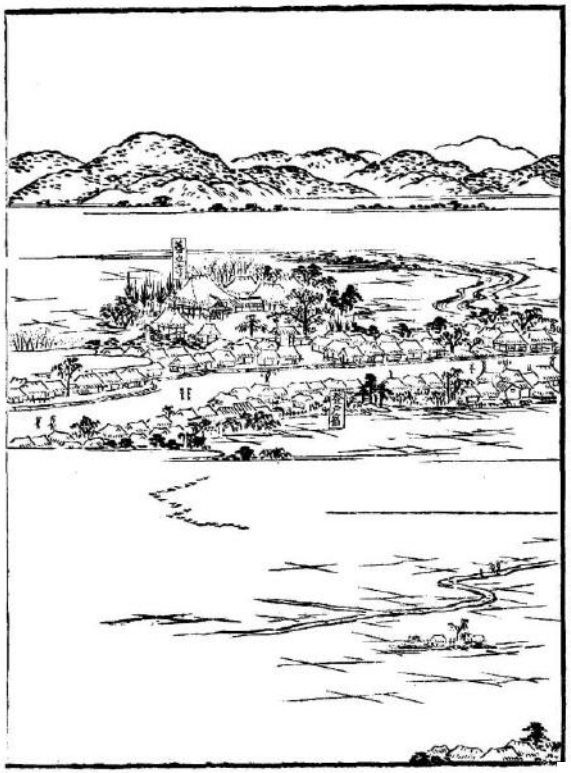
目　次

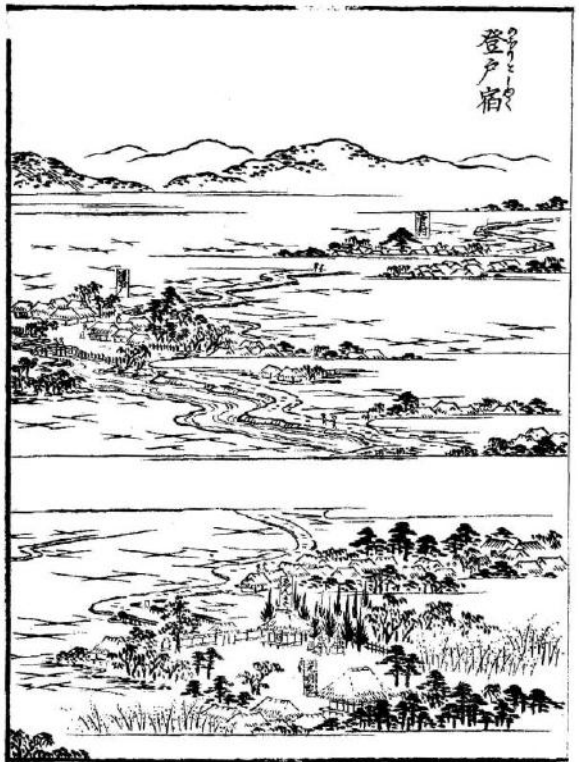
（上巻）

1. 日本武尊東夷征伐の図
2. 江戸東南より内海を望む図
3. 元旦諸侯登城の図
4. 日本橋
5. 日本橋魚市
6. 駿河町三井呉服店
7. 本町薬種店
8. 十軒店雛市
9. 鎌倉町豊島屋酒店
10. 飯田町　中坂　九段坂
11. 御茶ノ水　水道橋
12. 於玉が池の古事
13. 錦　絵
14. 両国橋
15. 新大橋
16. 永代橋
17. 増上寺
18. 泉岳寺

（下巻）

19. 登戸宿
20. 登戸の渡し
21. 日野津
22. 多摩川
23. 玉川鮎狩
24. 府中六所の宮
25. 四谷大木戸
26. 金龍山浅草寺
27. 金龍山浅草寺　其二　　二十軒茶屋
28. 金龍山浅草寺　其四
29. 節分会
30. 回向院
31. 五百羅漢寺
32. 六郷渡し場
33. 河崎山王社
34. 大師河原大師堂
35. 生麦村しがらき茶店
36. 小机城址　雲松院
37. 稲毛薬師堂（医王山影向寺）





19. 登 戸 宿

登戸という地名は、多摩丘陵への登り口にあたるからという説がある。この図では一見家の数はそんなに多くはないが、陸と川の交通の要所であった。物資や産物の集散地として栄えた場所であった。江戸の大都会を取り巻いて、たくさんの小さい集落地が生まれ今日に至る郊外の集落地の一例である。斉藤親子もこの郊外の集落地を丹念に探索して記事をものにしている。左方の一角に善立寺がある。創建年代は不詳ながら、天台宗寺院として慈覚大師が創建したと伝えられ、その後日成（天正４年1576年寂）が日蓮宗寺院として開山した。新編武蔵風土記稿にも縁起が詳しく述べられている。山門の前を津久井道が通り、柿生から相模へと道が伸びている。街道の荷物移動や多摩川を利用する筏の流しが活発で旅籠、居酒屋、煮売り屋、駕籠屋など、店が多く活気のある宿場であった。多摩川の川岸には河岸があり、集荷の仕分けや積み下ろしなどで賑やかであった。

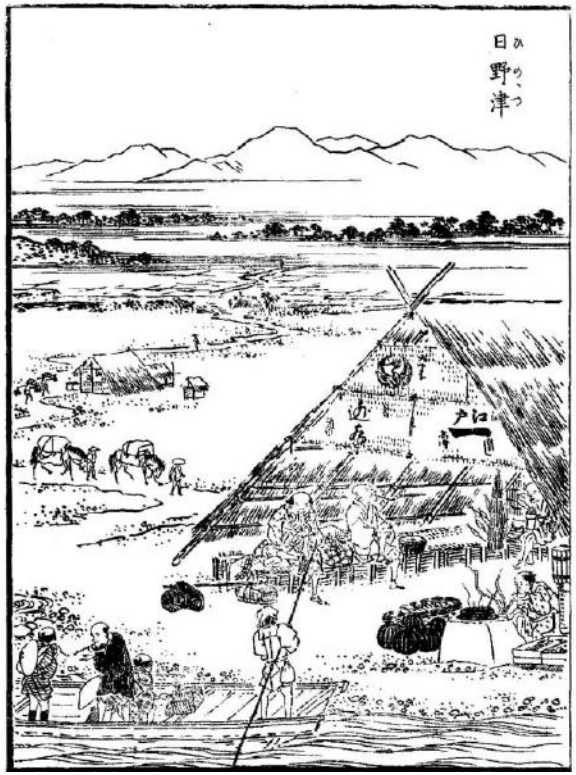
榎戸という集落が見えるが、ここも商家が多く、飯屋、菓子屋、仕立て屋、畳屋などがあった。

20. 登 戸 の 渡 し

お供を連れた女性が、広い河原や遥か相模の山々を眺めながら急いでいる様子である。

多摩川は水枯れ時で板橋がかかり、馬も通っている。向こうの河原にある小屋は、茶屋らしく煙が上がっている。向こう岸の堤防の上は街道のようで、その奥は登戸の集落である。西の空に渡り鳥が飛び去って行く。この渡しは大山阿夫利神社へ参詣する所謂大山詣での江戸っ子がよく利用した。また、幕末には津久井や愛甲地方からの絹がこの渡し経由で江戸へ送られた。

「新編武蔵風土記　宿川原村の条」によると「登戸の渡し」は、昔は鎌倉街道が多摩川を渡る時の渡しであった。この両岸は宿川原村の土地であるが、登戸村の隣接地であり、更に奥の村に向かうための渡しでもあるので、「登戸の渡し」といった。



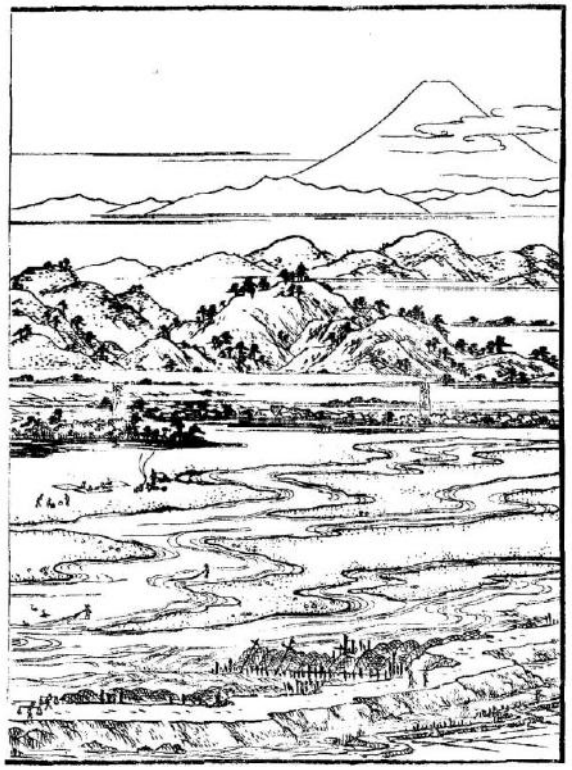
21. 日 野 津

登戸の渡しから少し上流に遡っていくと立川（柴崎村）の近くに、日野の津の「渡し場」がある。手前の渡し船にもう3人連れが乗っていて、船頭が向こうの苫屋（待合所）の方で待っている人に乗船を促している。坊さんが足を組んで煙草を吸い寛いでいる風情や、手前の亭主が何か食べ物を煮ていたり、西瓜らしきものも用意されている様子が興味深い。

駕籠の中は鮎のようである。甲州街道を西の方へ向かう旅人は、多摩川へ来るとこの渡し船に頼るしかなかった。渡し賃は天保5（1834）年頃で一人11文であった。

興味深いのは船の渡し場苫屋の筵壁にある「江戸一」や「鶴丸マーク」の文字や絵である。酒樽の菰（こも）を風雨よけに張っているようだ。この鶴丸マークは前に紹介した「錦絵」の鶴屋書店の暖簾にあるマークと全く同じ鶴丸マークである。酒店のマークと書店のマークが同じとは偶然であるにしても面白い。

余談だが、5代将軍綱吉時代の貞享5（1688）年に、鶴の字がご法度となった。鶴屋、鶴丸紋、鶴字の名前・・など全ての鶴に関する字を禁止したのである。禁止の理由は綱吉側室、お伝との愛娘が鶴姫という名であったから。ために、高名な井原西鶴が西鵬と改称したり、歌舞伎の中村屋の家紋が鶴丸であったので、これを変更したりと影響は大きかった。その後、鶴姫が宝永元（1704）年に死去したので、この悪法律は中止となった。



22. 多 摩 川

広い多摩川の景観である。現在の多摩川に比べ川幅が随分広いようだ。手前に堤防が曲がりくねって続いている。堤防の川側には右手に逆茂木、左手に蛇駕籠などが洪水被害を防ぐための施設として設置されている。手前右下の猪方、和泉の地名は現在の狛江市に残っている。

対岸の左に登戸、上流にかけて菅生、中の島、菅、矢野口の渡しなど現在の地名がそのまま見える。左手の川で鵜飼いをして鮎を取っているようだ。幕府に献上する御用鮎は鵜飼いで捕ったものという。登戸近くの河原では、何人かが川遊びに来て茶を沸かす煙らしい。

次の絵の左手に粗末な橋が見える。出水の度ごとに流されてはまた架けている橋である。古くから東西に旅をする人々にとって富士山とともによく話題にのぼったので、この川をテーマに詠んだものが多い。

水は箱　鮎は駕籠にて　江戸へ出る　　川柳

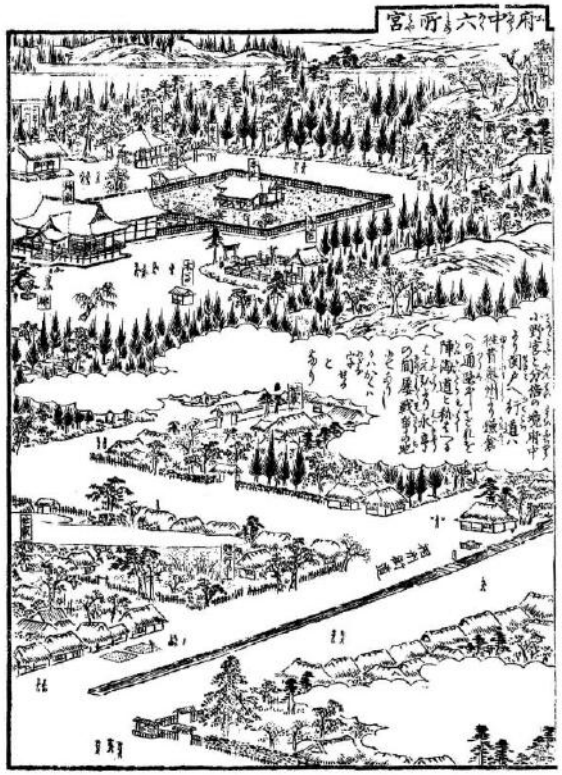
（水は玉川上水を指し、箱は四角な木製の水道管を指す）

23. 玉 川 鮎 狩

多摩川は水質や水苔に優れていたので、多摩川鮎は味がよく、江戸の人々に喜ばれていた。絵図では、裸の子供が鮎をつかんで二人の釣り師に見せている。この二人は大きな魚籠の中の鮎を買い求めようとしている。川の流れの中では男が投網を打っている。中州では3人が釣り糸をたれている。向こうの土橋を旅人が渡っている。

本文の多摩川の項では「和名類聚抄」「武蔵国風土記」などから多摩川の由来を詳しく説明している。甲州国境より当国多摩郡羽村まで十余里、羽村より六郷まで十六里という。

「東鑑」に曰く、この川は武蔵野の景勝で日野の津より以西は水石の美、奇絶もっとも多し。以東は平地と言えども長流の経る処往々勝景なきにあらず。鮎を以てこの川の名産とす。 ゆえに、初夏の頃より晩秋の頃まで、都下の人遠きを厭わずしてここに来たり、遊猟せり。

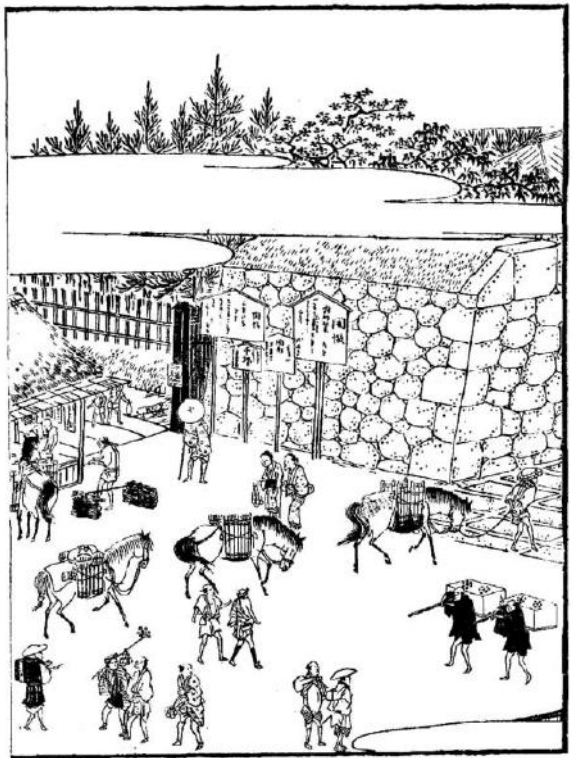


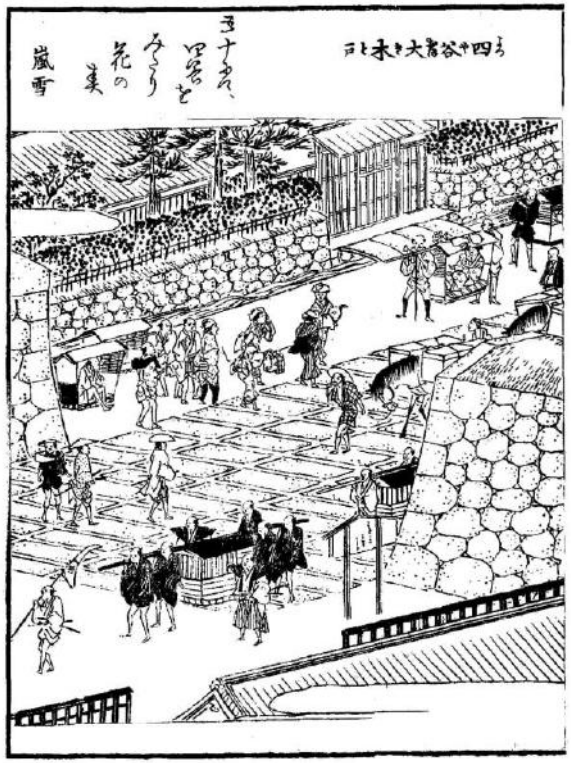
24. 府 中 六 所 の 宮

旧甲州街道の府中の宿であり、右手に六所の宮がある。宏大な社地を有し大きく樹木が茂っている。創立は古く景行天皇の41年(111年)と伝えられている。後に武蔵国の主な六つの神社を合祀して六所の宮と呼ばれるようになった。江戸時代には社領500石を得た。

徳川家康が関ヶ原の戦勝を感謝して馬場に欅の木を奉納し、現在これが見事な欅並木となっている。鎌倉街道の道筋にも当たり、騒乱の舞台となったところで戦陣の古跡が多い。府中はその名の通り大化の改新(645年)により武蔵国の国府が置かれ、政治文化の中心であった。

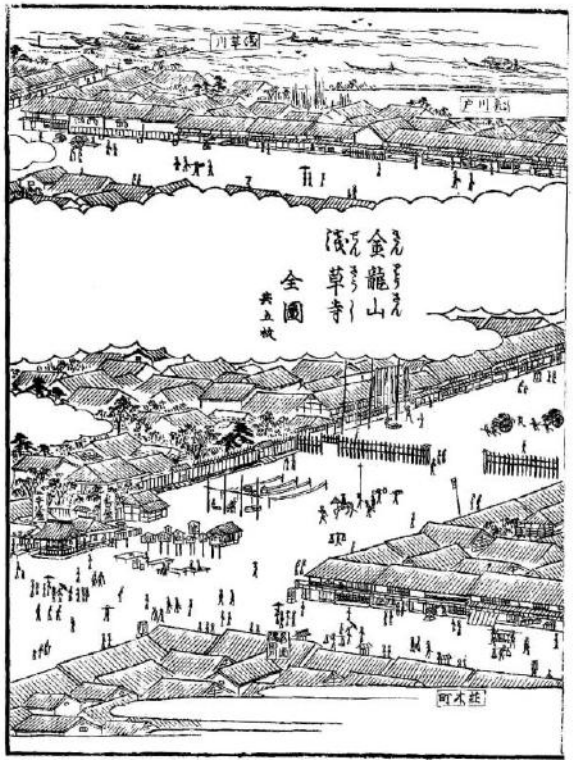
六所の宮の境内が詳細に描かれている。本文の説明では、「境内の樹々には鵜や鷺などの水鳥が巣を作り毎日品川などの海辺より餌を運び雛を育てているが、神社の随身門より中には一羽といえども入ることがないことは、当神社の七不思議の一つである。」とある。





25. 四 谷 大 木 戸

この大木戸は元和2年（1616）に設置され、寛政4年（1792）に廃止された。大木戸とは江戸城下町の入り口という意味である。家康入国のころまでは、この場所の左右は谷になっていて、道一筋であったこの関所で往来の者を糾問した。道の両側には高い石垣があり、手前に番屋の屋根が一部見える。本文では「ここの番屋は町の持ち物だが、突き棒、指股などを飾置けり」とあるので、かっては、武器を備えて道行く者を調べていたことが分かる。廃止になった後は通行は自由であった。大木戸の角から高位の武家行列が家紋のついた長刀持ち、挟み箱を担いでいる二人を先頭に進んで行く。馬が3頭、馬子の引く馬に従ってついていく。荷は桶の中に強烈な臭いを発する下肥えらしい。江戸が大都市になるにつれて、近郊農家いとっては良い肥料として貴重なものであり、あらそって汲み取りをしてこのようにどうどうと運搬していた。

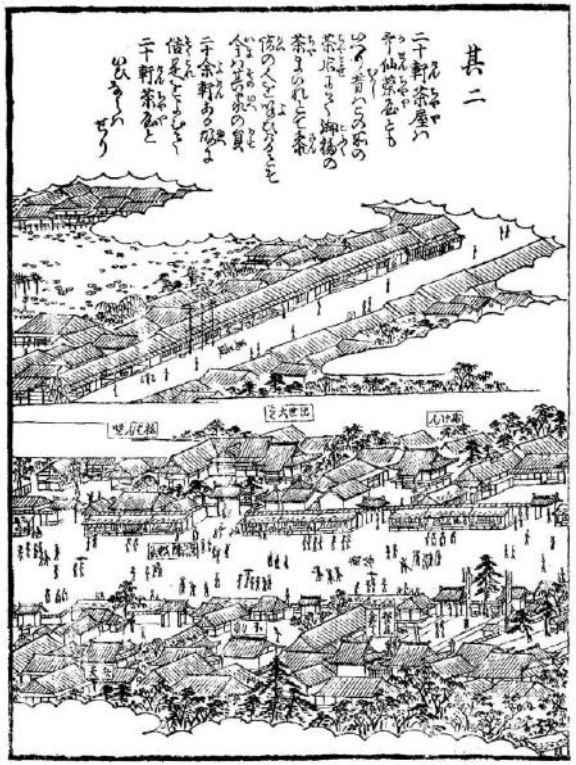


26. 金 龍 山 浅 草 寺

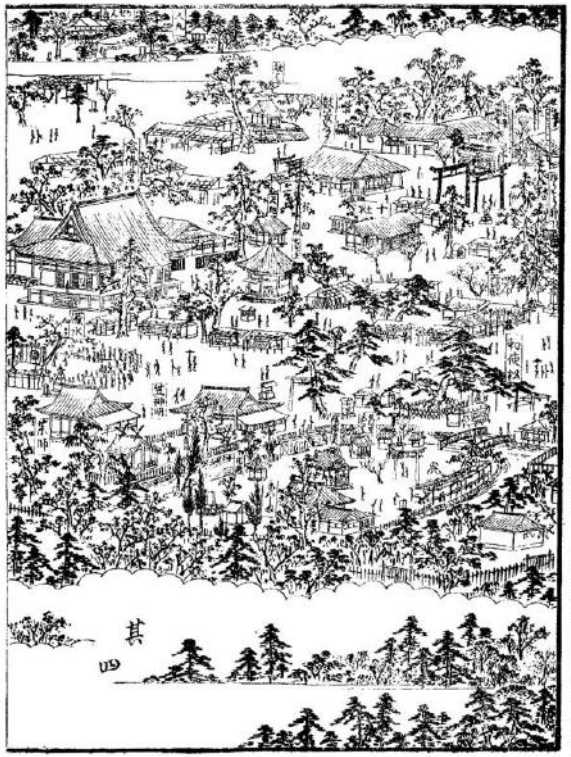
「江戸名所図会」の中で、この浅草寺の絵は12枚もあり最も多い。浅草寺の規模・人気の高さを示している。「江戸名所図会」の本文説明から、その由来を記すので江戸時代末期の浅草寺の状況を頭に描きながら「図会」とともにご覧頂きたい。

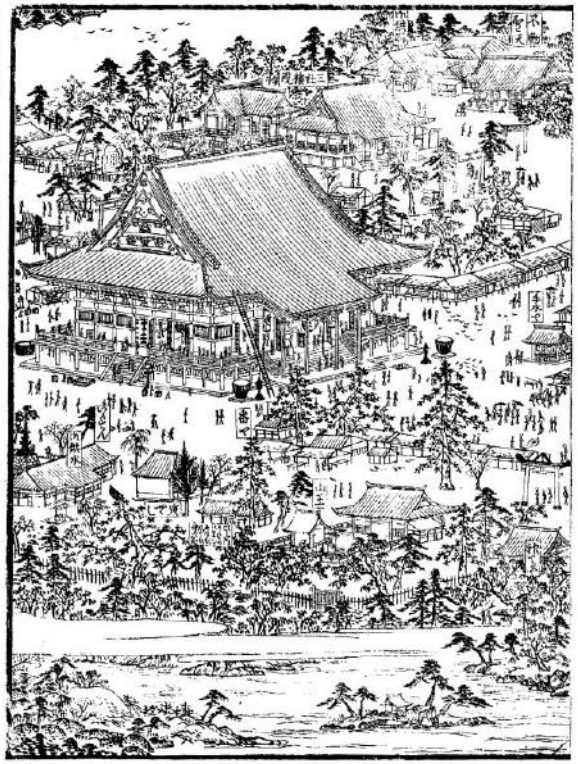
浅草寺は「伝法院」と号し、天台宗で東叡山（寛永寺）に属す。御本尊の縁起に曰く、推古天皇の御代（593－628年）に、檜前浜成（ひのくまはまなり）・竹成（たけなり）兄弟が江戸浦（隅田川）で漁をしていたとき、一体の観音様が網にかかったので、これを奉持して帰り、機縁の浅からずを思い、郷司土師中知（ごうじはじのなかとも）は聖観世音菩薩さまであると知り、深く帰依して自宅を改めて寺となし、供養に生涯を捧げた。

大化元年（645）勝海上人がこの地においでになり観音堂を建立し、夢告によりご本尊を秘仏と定め、以来今日までこの伝法の掟は厳守されている（現在誰も見た人はいない）。



27. 金 龍 山 浅 草 寺 其二　二十軒茶屋





28. 金 龍 山 浅 草 寺 其四

この後浅草寺は、鎌倉以降の歴代将軍の篤い帰依を受け、堂塔の威容整い江戸文化の中心として栄えた。其の四の絵図では、本堂が絵のほぼ中央に雄大な姿をみせている。屋根に掛かる大きな梯子が見えるが点検や防火の為と思われる。左手の横に「源水」の人だかりがある。松井源水が独楽廻しの芸を披露している。吉宗将軍の上覧に供したほどの巧みな技であったという。代々の曲芸独楽師で13代目は慶応2年（1866）に欧米にまわり、大変な評判を得た。

都内最古の寺院である浅草寺は、現在年間3000万人もの参詣者が訪れる屈指の観光スポットとなっており、外国人にも人気が高い。

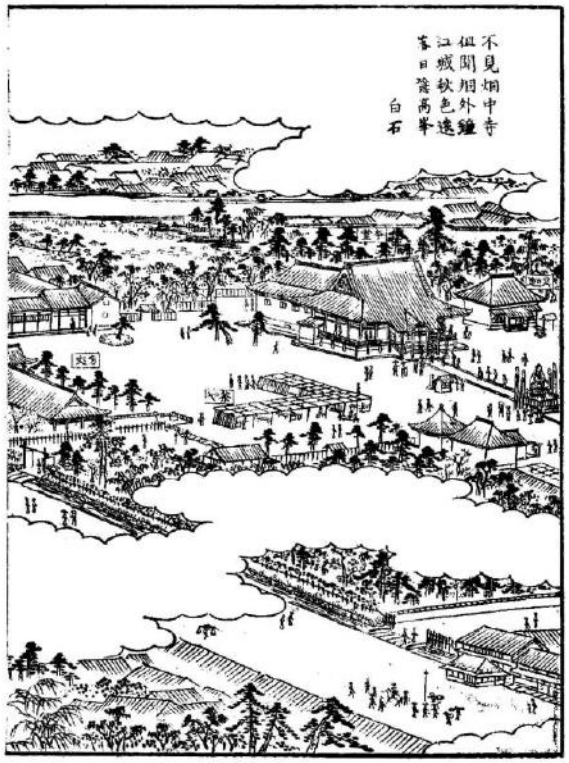
29. 節 分 会

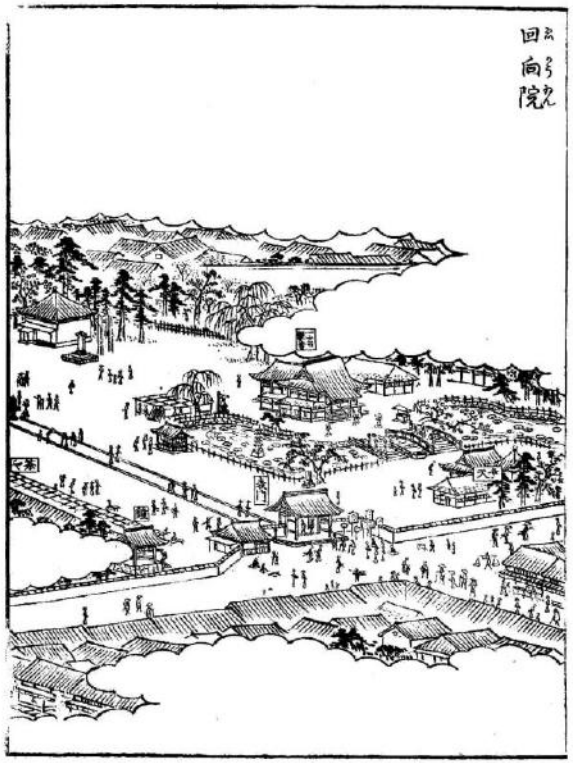
浅草寺の数多くの祭礼行事のうち、この節分会は多くの参詣者が堂内に満ち満ちて、その賑やかなことは言葉で言い尽くせない。そもそも当寺は1170年を経る古刹で、その霊験新たかなことは広く世の知る処なり。ことさら毎月17日には終夜誦経怠りなし。境内の売り物の数が多い中にも錦袋円、浅草餅、楊枝、数珠、茶筅、酒中花、浅草海苔などは有名である。

さて、節分会の行事では、現在は有名スターや関取などが、高いところから豆やお土産代わりの小物を投げて、それを我先に取り合うのが恒例行事となっている。

この時代には絵図にあるように、何やら「紙」を撒いている。これは守り札で参拝客の多くは、この守り札を貰いたい一心で参拝に訪れていたようである。

なお、高いところとして門柱の中間に台を取付け、そこに3人が乗って僧侶が守り札を投げ、用人二人が大団扇で遠くへ満遍なく行き渡るように、扇いでいる。怪我が心配な絵図である。





30. 回 向 院

山号は、国豊山と称す。無縁寺回向院ともいう。本所地域内に所在していることから「本所回向院」とも呼ばれている。

振袖火事と呼ばれる明暦の大火（1657 年（明暦 3 年））の焼死者 10 万 8 千人を幕命（当時の将軍は徳川家綱）により葬った万人塚が始まり。のちに安政大地震をはじめ、水死者や焼死者・刑死者など横死者の無縁仏も埋葬する。

あらゆる宗派だけでなく人、動物すべての生あるものを供養するという理念から、軍用犬・軍馬慰霊碑や「猫塚」「犬猫供養塔」「小鳥供養塔」、邦楽器商組合の「犬猫供養塔」（三味線の革の供養）など、さまざまな動物の慰霊碑、供養碑、ペットの墓も多数ある。

1793 年（寛政 5 年）、老中・松平定信の命によって造立された「水子塚」は、水子供養の発祥とされている。なお山東京伝、竹本義太夫、鼠小僧次郎吉など著名人の墓もある。

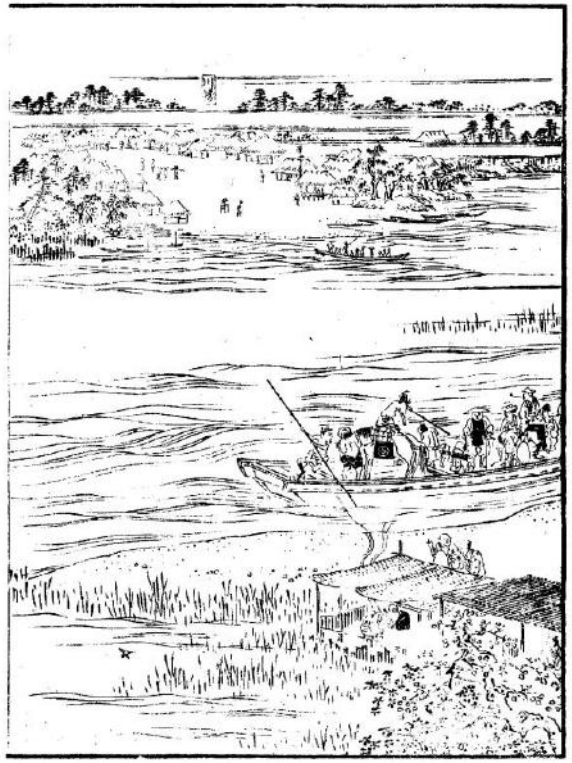
1781 年（天明元年）以降には、境内で勧進相撲が興行された。これが今日の大相撲の起源となり、1909 年（明治 42 年）旧両国国技館が建てられるに至った。国技館建設以前の相撲を指して「回向院相撲」と呼ぶこともある。

「回向院開帳参り」として地方諸国の霊仏・霊神等、結縁のため大江戸に出て開帳せしめ、当院にて拝むことで、地方の有名仏閣などに出向く手間を省く参拝客も多かった。

31. 五 百 羅 漢 寺

正式名称は天恩山五百大阿羅漢禅寺という。当寺の五百羅漢像は、開基の松雲元慶（1648 － 1710 年）が独力で彫り上げたものである。松雲は京都の出身で、「鉄眼版一切経」で知られる黄檗宗の僧・鉄眼道光に師事した。

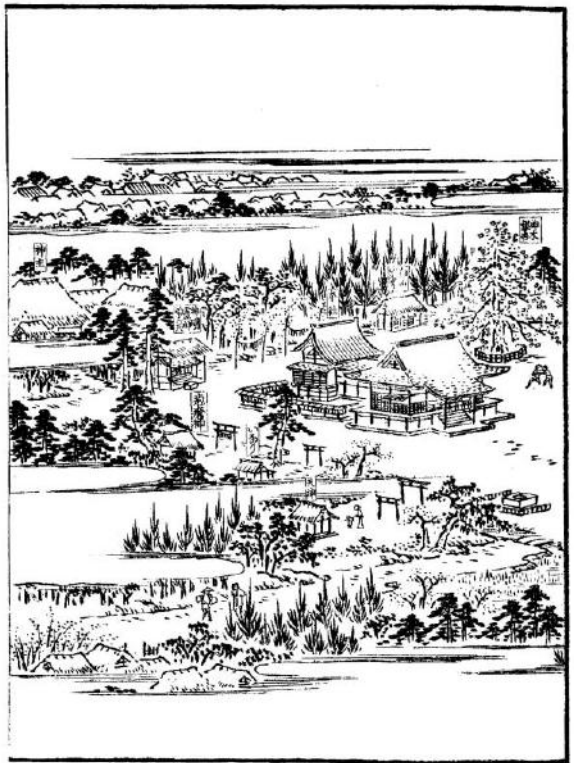
松雲はある時、豊前国の羅漢寺（大分県中津市本耶馬渓町）の五百羅漢石像を見て、自らも五百羅漢の像を造ることを発願した。貞享4年（1687年）、40歳で江戸に下向した松雲は托鉢で資金を集め、独力で五百羅漢像など 536 体の群像を造った。この羅漢のすべての尊号（名前）が江戸名所図会本文に記載されている。羅漢寺の創建は元禄 8 年（1695）のことで、松雲が開基、師の鉄眼が開山と位置づけられている。当時の羅漢寺は本所五ツ目（現在の東京都江東区大島3丁目）にあった。彫像は近代以降、寺の衰退時に多くが失われ、羅漢像 287 体を含む 305 体が現存している。3 代目住持の象先元歴（1667 － 1749年）は、羅漢寺中興の祖とされており、彼の時代に大伽藍が整備された。象先は正徳 3 年（1713年）に羅漢寺住持となり、本殿、東西羅漢堂、三匝堂（さんそうどう）などからなる大伽藍を享保11年（1726年）までに建立している。三匝堂は江戸時代には珍しかった三層の建物で、その特異な構造から「さざえ堂」とも呼ばれた。建物内部は螺旋構造の通路がめぐり、上りの通路と下りの通路は交差せず、一方通行となっていた。三層にはバルコニーのような見晴台があった。この建物の様子は葛飾北斎が代表作『富嶽三十六系』の中の「五百らかん寺さざゑ堂」で描いているほか、歌川広重などの浮世絵師も題材にしている。なお、五百羅漢寺は明治になって目黒へ移転、「さざえ堂」は現存していない。



32. 六 郷 渡 し 場

多摩川も河口付近は、古くは六郷川よ呼ばれていたため、六郷の名がついたと言われる。家康はこの地に、長さ 109 間（198,4 メートル）、橋幅 4 メートルという大きな橋をかけさせた。六郷橋は、千住大橋、両国橋と並んで「江戸三大大橋」と呼ばれたが、早くからたびたびの洪水で破損、元禄元年（1688）の洪水で流されたのち、橋は再建されず、江戸期 200 年あまりを通じて「渡船渡し」となった。以後明治 7 年（1874）に、鈴木左内が橋をかけるまで、橋のない状態が続いた。『江戸名所図会』では、享保年間に、洪水の被害を除くために、橋をやめて「舟渡し」にしたと書かれてるが、実際には元禄年間から舟によって渡っていたようだ。

絵を見ると、舟の後ろと左側に二人の船頭が見える。船の乗客は馬一頭と馬子、山伏、お宮参り、荷物を担いだ商人、女性を2名含んだ9人が描かれ、岸には船に呼びかける 2 人の男や馬から荷物を下ろす指示をする武士が描かれている。ところで、渡し賃はどのくらいだったのかというと、武士や僧侶など、支配階級と、それに準ずる階層の人々は無料だった。この人たちが、乗船客の7割近くを占めていたようだが、それでも町人たちの渡し賃で、年間 500 両（現在価値で約 800 万円程度）になったようだ。当初、渡し賃は八幡塚村の扱いだったが、不都合があり宝永 6 年（1709）以後、幕府は疲弊した川崎宿を助ける目的もあって、権利を川崎宿に移した。



33. 河 崎 山 王 社

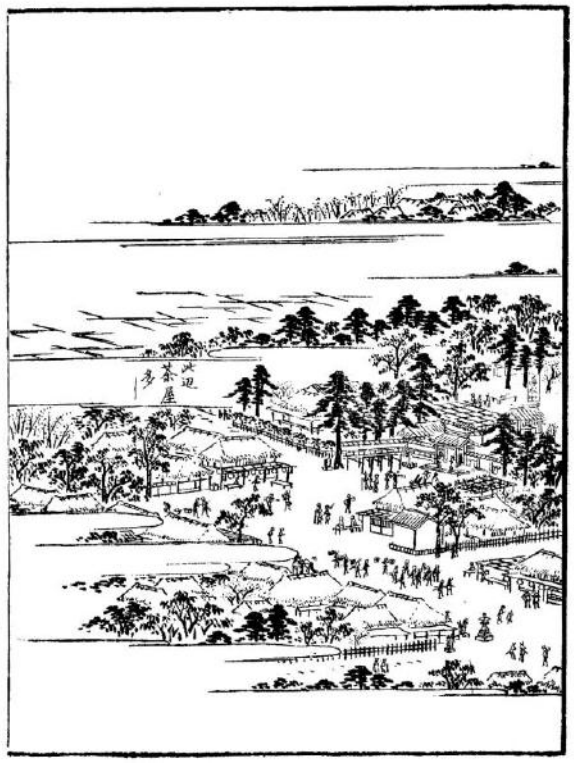
現在の稲毛神社は、江戸時代までは「川崎山王社」と呼ばれていた。そのため現在も氏子のみなさんは「山王さん」と呼び親しんでいる。社伝では欽明(きんめい)天皇の時代(6 世紀頃)に鎮座したといい、江戸時代に編さんされた『新編武蔵風土記稿』では、源頼朝の頃、佐々木高綱が奉行(ぶぎょう)となって社殿を造営したと伝えている。

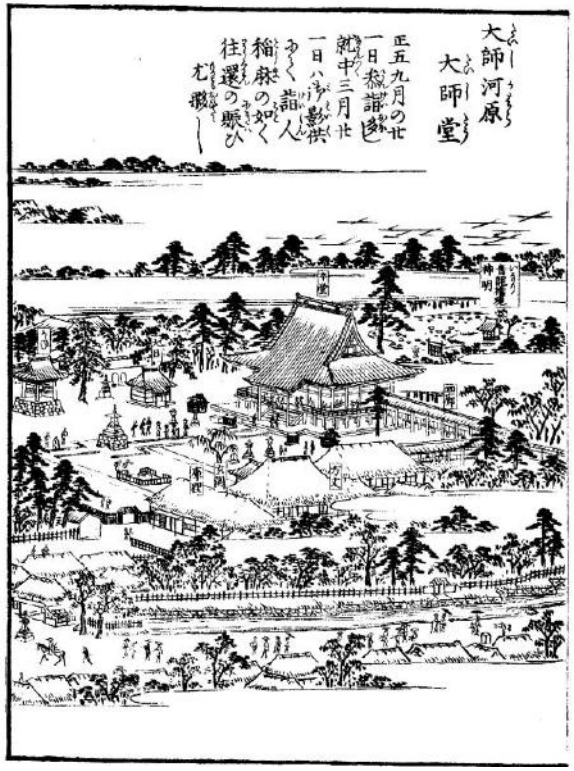
また、上丸子日枝神社縁起をみると、日枝神社すなわち山王社は、近江坂本の日吉大社の御分霊をまず稲毛庄内河崎村へ勧請(かんじょう)し、のち上丸子へ遷座したと記している。稲毛神社が山王社と言われたのは、そのあたりに理由があるものと推定される。

いずれにせよ平安時代から、河崎庄(かわさきのしょう)の鎮守社であったと考えてよいと思われる。

近世に入ると、天正 20 年(1592)の検地によって、社領 22 石 1 斗 8 升 6 合が確定し、慶長 4 年(1599)には朱印地 20 石が安堵(あんど)された。

江戸時代を通し、東海道川崎宿の総鎮守として人々の崇敬を集め、師走 27 日には境内に市(いち)が立って賑わった。





34. 大 師 河 原 大 師 堂

川崎大師は、真言宗智山派の大本山平間寺の通称です。平間寺は金剛山金乗院と号し、俗に川崎大師・厄除弘法大師と称されている。

平間寺創建の由来は、当地に住んでいた平間兼乗が、川崎市の夜光る沖合で、海中へ網を投げ入れたところ、弘法大師の木像を引き揚げた。そこで兼乗は木像を洗い清め、花を捧げて供養していたという。諸国遊化の途中に訪れた高野山の尊賢上人は、弘法大師の木像に纏わる話を聞き、兼乗と力をあわせ、1128 年(大治 3 年)に平間寺を建立したと伝えている。

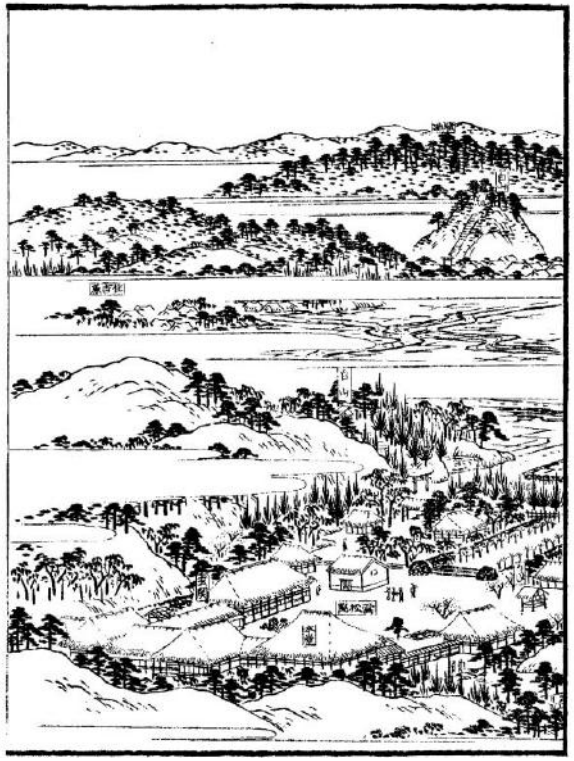
この弘法大師像は、下平間村の稱名寺が真言宗から一向宗(浄土真宗)に宗旨を改めた際、多摩川に流されたものとも伝えられている。永治元年(1141)には近衛天皇により勅願寺の宣旨を受けた他、江戸時代には、将軍家より寺領 6 石の朱印状を拝領、現在に至るまで多くの縁日等を催し、賑わっている。正月の初詣客は多く、2012 年には、296 万人を記録した(同年全国3位)。

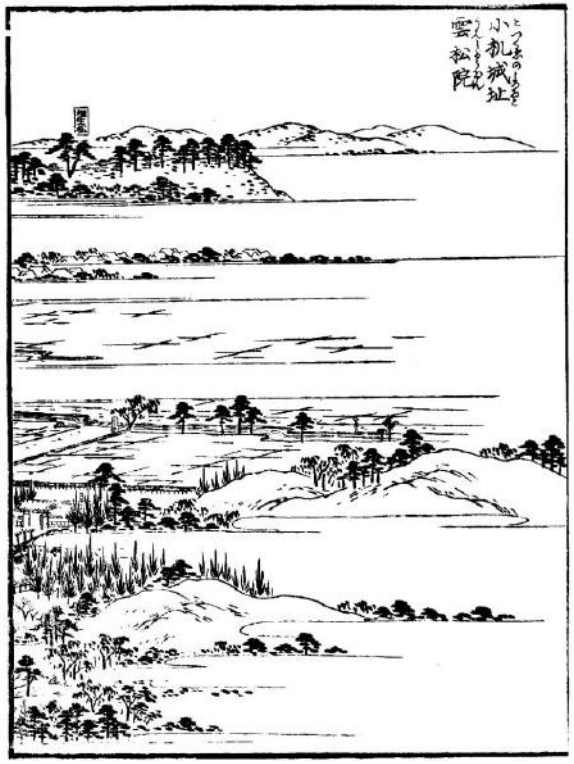
35. 生麦村しがらき茶店

幕末の生麦事件でお馴染の生麦村の名は、ご存知の方が多いと思う。生麦村は鶴見川の河口に広がる漁村で、徳川将軍家に魚を献上する御菜ハヶ村の一つだった。またこの地は、河崎宿を出て神奈川宿に至る中間点にあたり、旅人の多くがちょいと一服とばかり、しばしの休息を取りたくなる位置に立地していた。

享保年間（1716～36 年）に、この地に「しがらき茶屋」という水茶屋が出来、竹皮に包んだ梅干しと、梅漬けの生姜をお茶請けにと客に供したところ、これが疲れが取れると評判になり、この地を往来する旅人のほとんどが、この店で一休みすることとなり、大変な繁盛ぶりを見せたと言われる。

長谷川雪旦の筆も、茶屋の混雑ぶり、繁盛ぶりを見事に表現している。なお平岩弓枝の『御宿かわせみ』に、しがらき茶屋が登場する。現在も魚河岸があり、魚屋さんが軒を並べている。



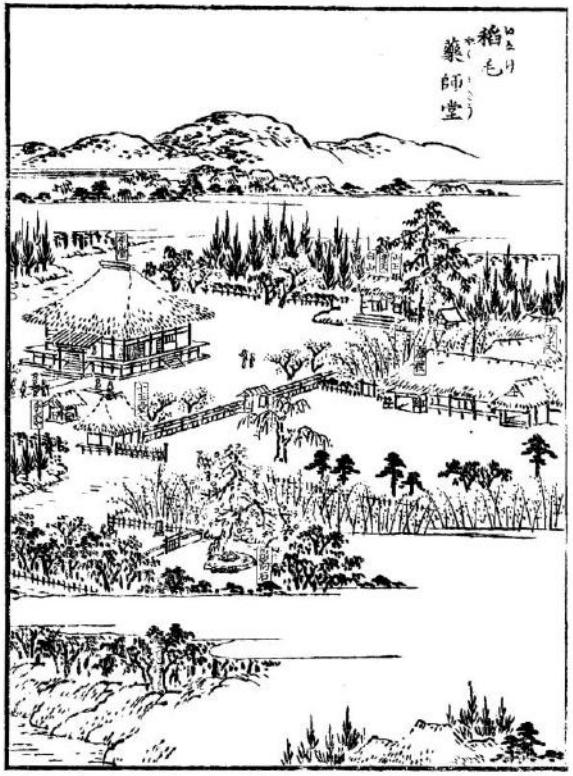


36. 小机城址雲松院

小机城は、室町時代に関東管領だった上杉氏によって築城されたが、その後いったん廃城となった後、後北条の勢力下に入ると、北条氏綱によって修復され、家臣の笠原信為が城主として配置された。笠原氏は小机衆を組織し、城を中心に付近に名僧を招いて寺院を建立するなど、城下町の整備に力を注ぎ、江戸時代に入っても、子孫はこの地付近に住み続けていたらしい。

1590 年の秀吉による北条攻めの際には、小机城は無傷のまま落城、その後徳川家康の関東入府の際に廃城となったが、城の遺構は、小机城址市民の森として整備されており、本丸や二の丸跡など主要部分が残されている。城跡の地下には横浜線の城山トンネルが貫通している。

雲松院は、笠原信為が開基となって整備した曹洞宗の寺院で、宝暦年間に建立された方丈造りの本堂、葵の紋入りの山門などが現存している。



37. 稲 毛 薬 師 堂（医王山影向寺）

宮前区野川の中原街道沿いに位置する、天台宗の寺院。本尊は薬師如来で、稲毛薬師とも呼ばれる。創建当時の建造物は無く、遺物もほとんど残されていないが、「関東の正倉院」とも呼ばれる関東地方屈指の古刹。『影向寺縁起』によれば、創建は天平 12 年（740 年）、開基は行基とされるが、近年の発掘調査によって、境内から出土した軒丸瓦の様式等により、創建は 7 世紀後半にまで遡ることが確実視されている。

ただし、発掘調査から推定された創建当初の影向寺は、大規模な寺院ではなく、当地を領有した豪族の私的な仏堂であったと考えられている。奈良時代に金堂が整備されたこと、また今日「影向石」と呼ばれている巨大な塔心礎石と、基壇の痕跡から現存しない三重塔も建設されたと推定されている。

本尊の木造薬師如来と両脇侍像（薬師如来坐像・日光菩薩立像・月光菩薩立像）は、様式・技法等から 11 世紀後半の造立と推定され、それ以前の本尊については不明である。

影向寺は平安時代には天台宗の寺院となり、中世には深大寺との関係を深めていったと見られる。他の地方寺院と同様に、当寺も中世頃には庇護者を失っていたと考えられるが、深大寺との関係を利用して伽藍再興の勧進を行ったと見られ、15 世紀（応永 22 年頃か？）には旧金堂を廃し、密教本堂様式の小規模な本堂が建立されている。

当寺は元々栄興寺と称し、後に養光寺、さらに万治年間（1658 年－1660 年）に影向寺に改めたとされる（『新編武蔵風土記稿』）。 1694 年（元禄 7 年）、劣化・損傷の進んだ本堂の再建が行われた。この本堂（薬師堂）は現存し、神奈川県の重要文化財に指定されている。また、江戸時代には、「影向石」のくぼみ（塔の心柱の臍穴、及び仏舎利の納められた穴がつながったものと思われる）にたまった水で眼を洗うと眼病が治ると言われ、各方面から当寺を訪れる眼病患者でにぎわった事が、記されている。

『江戸名所図会』が「稲毛薬師堂」として、当寺を取り上げ、長谷川雪旦は薬師堂（本堂）の脇に、垣根を巡らし、入口に戸鎖をかけて、むやみに立ち入ることを禁じていた様子と、影向石に屋根付きの小屋を設けて、保護している様子を描いている。

『江戸名所圖會（えどめいしょずえ）』で取り上げられた名所旧跡の採録範囲は、東は千葉の船橋、西は東京の日野、南は横浜の金沢、北は埼玉の大宮までと、北部に欠けるところがあるものの、およそ武蔵国全体に及んでいます。

江戸城の描写については、江戸時代に入ってからの事柄について記載されていないこと、また江戸城自体は挿画にも描かれていません。この理由は、享保7年(1772)に出された出版規制で、徳川家のことに触れた書物を出版してはならないとされており、著者の3代の斎藤家当主は、いずれも名主であって、特に長秋（幸雄）と莞斎（幸孝）は書物改めを務めた立場にあり、規制に触れるような記述は避けたのだろうとされています。

巻の構成は、次の図のとおり七巻を北斗七星の七つの星（紋）に対応させたと記しており、巻之一には「天枢とは天の中枢・北斗七星の第一位にあたる星」と記載され、江戸城を中心に江戸の南部・西部・北部・東部と時計回りに「の」の字に結ばれるように配置したことが述べられています。挿絵は、長谷川雪旦（せったん）雪堤（せってい）父子によるものです。

前半 1-3 巻(10 冊)は天保5年(1834)、後半 4-7 巻は天保 7 年(1836)に刊行されました（全 7 巻 20 冊）。

全 7 巻 20 冊の構成と対象地域　（出典：JTBパブリッシング）

巻と冊数	巻の名称	名所旧跡の採録範囲
巻之一（三冊）	天枢（てんすう）之部	千代田区、中央区、港区
巻之二（三冊）	天璇（てんせん）之部	品川区、大田区、神奈川県湾岸部
巻之三（四冊）	天璣（てんき）之部	渋谷区、目黒区、世田谷区、多摩南部
巻之四（三冊）	天権（てんけん）之部	豊島区、新宿区、板橋区、中野区、練馬区、杉並区、多摩北部、埼玉県の一部
巻之五（二冊）	玉衡（ぎょくこう）之部	文京区、北区、埼玉県の一部
巻之六（二冊）	開陽（かいよう）之部	台東区、荒川区、足立区
巻之七（三冊）	揺光（ようこう）之部	江東区、墨田区、葛飾区、江戸川区